様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３３３０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2024
課題番号：２１Ｋ１０８５０

研究課題名（和文）「家族から地域へ拡張した異世代間の子育て支援プログラム」の開発

研究課題名（英文）Development of "Intergenerational Child-rearing Support Program Expanded from Family to Community"

研究代表者
三反崎　宏美（MITASAKI, Hiromi）

金沢医科大学・看護学部・講師

研究者番号：００８０３５３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：祖父母世代と子育ての世代間交流は、双方に良い影響があることが先行研究から明らかになっていた。祖父母世代にとっては高齢者支援機能や居場所になっていること、子育て世代にとっては子育て支援機能があることで孤独感の軽減となっていた。しかし現在の世代間間交流による子育て支援は、祖父母世代のボランティアで成立しており、祖父母世代の継続や活動の拡大が課題となっている。そこで、家族で担えない子育て支援は、この先、血縁関係のない祖父母世代と子育て世代が交流し、双方に影響があるプログラム作成が必要となる。祖父母世代のジネラティビティ（世代継承性）を高め、子育て世代の孤独感が軽減する子育て支援プログラムを構築する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年の社会変化に伴い、子育ては孤独感な営みになっている。祖父母世代の高齢者は近年増え続けており、現在の世代間交流による子育て支援は、その祖父母世代ボランティアで成立しており、祖父母世代の活動の継続や拡大が課題となっている。そこでこのプログラムは双方に良い影響を与えることを目的とした。祖父母世代は世代間交流に参加しジェネラティビティを高めることとなり先に迎える時間に変化があったり、死の受け入れも変わってくると言われている。子育て世代は、外に出ることに繋がり、異なる世代と会話したり、知らないことを知ることで孤独感のある育児が軽減する。この先プログラムを展開し、検証をしていく予定である。

研究成果の概要（英文）：It has become clear that intergenerational exchange between the grandparent generation and child-rearing has a positive impact on both. For the grandparent generation, it serves as a support function for the elderly, and for the child-rearing generation, it serves as a child-rearing support function, reducing feelings of loneliness. However, current child-rearing support through intergenerational exchange is made possible by volunteer work from the grandparent generation, and the continuation and expansion of activities by the grandparent generation is an issue.s.Therefore, in order to support child-rearing that cannot be handled by the family alone, it is necessary to create a program that will have an impact on both the grandparent generation and the child-rearing generation, who are not related by blood. We will create a child-rearing support program that will increase the generativity of the grandparent generation and reduce the sense of loneliness of the child-rearing generation.

研究分野：Maternal and Child Nursing

キーワード：child-rearing support　grandparents' generation　Intergenerational　Exchange

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

わが国の平均寿命が延びた裏では少子化が進み、65 歳以上の老年人口は全人口の 1/4 と年々増えている（平成 27 年,国勢庁査）。我が国の平均寿命が延びた裏では少子化が進み、65 歳以上の老年人口は全人口の 4 分の１と年々増えている(平成 27 年.国勢調査)。一方、合計特殊出生率は 1.43(平成 27 年.内閣府)と低く、一人の女性が産む子どもの数の減少が止まらない。また、労働統計では 30～39 歳を底辺とする M 字カーブを示すが、近年、M 字カーブが緩やかになり、30 歳代女性は離職をせず出産・育児を行う状況に変化している。その為、子育て支援の内容も変化し、就業との両立や孤独に陥らないための支援が求められ、切れ目のない地域社会の支援が喫緊の課題である。国の対策として、育児休業の推進、ワークライフバランスの実現、その他、次世代育成支援対策の推進として、次世代を担う子ども達が健やかに育つための環境をつくるために次世代育成支援対策推進法に基づき、地方公共団体、事業主、国民がそれぞれの立場で支援を進めていくと記されている（令和元年.厚生労働省）。その対策の一つとして高齢者を子育て支援の人材資源として注目した。60 歳を過ぎてなお活躍を続ける高齢者は多く、元気な高齢者を子育て支援の人材資源として生かすことに大きな期待が寄せられている。しかし、近年、核家族化は 59.8%(令和元年.厚生労働省)と進行しており、三世代世帯の割合は 5.1%(令和元年.厚生労働省)と過去 15 年間減少をたどっている。つまり、家族内で祖父母世代を子育て支援に活用することには限界がある。

申請者の研究においては、祖父母は孫の日常生活を支えるという意識から、両親がいない間の親代わりとして接し、また豊富な人生経験で両親を見守る意識より、親の相談相手となるなど親の子育てを支え、さらに孫と同様に地域の子どもを思い、登校下校を毎日見守るなどをしていた。その結果、祖父母は孫育てを通して自己の発達課題に向かっていることが明らかになった。エリクソンの発達課題でも示されるように、祖父母にとっての孫育ては、主体的な Well-being の増進や地域社会で活躍することで、新たなアイデンティティを獲得する大事な過程であると考えられる。そこで、祖父母世代による支援を血縁関係の無い地域の親子に提供することが出来れば、切れ目のない子育て支援が可能となり、さらに祖父母世代にとっても発達課題の実現が可能ではないかと考えた。先行研究では、地域子育て支援を受けた親子の「育ち」として、8 割の親子に変化があり、親は心の安定、人間関係が拡がり、子育て力が高まり、自己の成長になった、子どもは基本的生活習慣や社会性、自主性、人との関わり方などに変化があったことが明らかにされている（三好.2019）。また、中高年者が地域で活躍する子育て支援では、次世代育成に関心が高く、自身の受援を次世代につなぐ循環型の共生が根付いている（吉田.2020）。

これらのことを踏まえて申請者は、子育ての中心にいる両親と子どもと、子育て支援をしている祖父母世代の三者に利益のある子育て支援の形を調査・検討することにより、血縁関係の無い祖父母世代を含めた「家族から地域へ拡張した異世代間の子育て支援プログラム」の開発・提案を計画した。本提案プログラムの有用性が明らかになれば、家族間での異世代子育て支援に有用であるばかりでなく、社会へ拡張した異世代間の子育て支援プログラムの展開を目指すことも可能となり、少子化社会の中で長生きする高齢者、子育て支援の必要な親世代、生育する子ども間の相補的トライアングルが成立することとなる。

２．研究の目的

本研究の目的は、「家族から地域へ拡張した異世代間の子育て支援プログラム」の開発・提案である。血縁関係の無い祖父母世代が、地域で子育て支援を行い、それを受けた親世代また子どもにどのような影響があるのかを明らかにし、祖父母世代、親世代、子どもにとって三者にとって利益のあるプログラムを構築することである。

３．研究の方法

本研究は 3 年間で実施とする

2021 年【研究１】地域社会における血縁関係の無い祖父母世代の子育て支援の実態の把握、祖父母代はどんな支援をしているのか、母親世代はどんな必要としているのかを明らかにする。

国内外の文献レビュー　(三反崎)

血縁関係の無い祖父母世代がどのような子育て支援を行っているのか、受けた母親世代はどんな支援を求めているのかを明らかにしプログラム原案に活かす。

2022 年【研究２】地域での血縁関係のない祖父母世代における子育て支援の実態を調査する。

血縁関係の無い祖父母世代の子育て支援の原案作成(三反崎・波﨑・嶋・内江・上澤)

研究１を基礎データとして、祖父母世代に対し、事前教育を実施し、子育てマイスターを認定し、ボランティアとして子育て支援を行っている施設において、実態と課題についてフォーカスグループインタビューを行い分析する。

研究分担者とともに分析した内容を精査する。同意の得られる機関に協力を依頼する。

2023 年【研究 3】地域での血縁関係のない祖父母世代における子育て支援を実施し、その結果から「家族から地域に拡張した異世代間の子育て支援プログラム」の開発

(三反崎・波﨑・嶋・内江・上澤)

「家族から地域へ拡張した異世代間の子育て支援プログラム」原案を作成する。研究分担者に意見を求め検討し、さらに子育ての渦中にいる親世代と子育て支援を行った祖父母世代の対象者に意見を求め検討する。

４．研究成果

研究１では、プログラム構築に向け、現在の子育て支援の実態と課題、世代間交流が子育て世代に与える影響、高齢者に与える影響について文献レビューを行った。

医中誌 Web, Pub Med, CINAHL, MEDLINE のデーターベースにより 2013 年から 2022 年の 10 年間に発表された原著論文を検索した。用いたキーワードは、「Intergenerational exchange／世代間交流」「Child care support／子育て支援」である。そのうち、6 文献（海外文献 0、国内文献 6）を対象とし分析した。

世代間交流を生かした子育て支援では、祖父母世代も子育て世代も満足をしていた。祖父母は子どもと触れる、母親世代と触れることで社会の役に立っている意識が持て、子育て世代は、祖父母世代という普段身近にいない人の存在に触れ安らいだり、子どもを見てもらいゆっくりとした時間が過ごせたりと満足を得ていた。課題としては、現在にあるしくみは、ほとんどが、祖父母世代のボランティアで成り立っていること、高齢者世代のボランティアの継続性の問題があった。また、高齢者特有のネガティブな感情が先入観としてあり、積極的に関わることの難しさがあげられていた。

表１　文献一覧

	著者/発行年	対象者/研究目的
1	田中富美子他/（2021.4）	**対象者：**活動を 15 年間継続している子育て支援ボランティアグループメンバー−12 人 **研究目的：**グループ活動継続要因を明らかにする。
2	和田希美他/（2017）	**対象者：**老人クラブ連合会会員 500 名 **研究目的：**世代間交流が高齢者のジェネラリビティに影響と精神的健康に与える影響について明らかにする。
3	小石真子他/（2014）	**対象者：**子育て支援ボランティア 17 人 **研究目的：**子育て支援ボランティアの実態調査
4	那須川知子他/（2015）	**対象者：**アンケート調査は、兵庫県在住の 40 歳以上の男女 1462 通の回答、インタビュー調査は、50 歳〜80 歳の男女 50 名 **研究目的：**祖父母世代の子育て支援への意識を明らかにする。
5	横川和章他/（2015）	**対象者：**「まちの寺子屋師範塾」実践で学ぶ子育て支援というテーマの講座に参加した 50 歳〜70 歳代の男女、2008 年から 2012 年までの 5 年間の縦断的調査。 **研究目的：**「まちの寺子屋師範塾」に参加し、祖父母世代にとってどのような意味があったかを検討し、地域子育て支援のあり方の示唆を得る。
6	RyotaSakurai/（2016）	**対象者：**「PEPRINTS」参加者 62 名、対照群 100 名 **研究目的：**絵本読み聞かせプログラム「PEPRINTS」(世代教官による生産性の研究)が高齢者に与える長期的影響を調査する。
7	藤原佳典/(2006 年)	**対象者：**2004 年に一般公募による 60 歳以上ボランティア群 67 人、対照群 74 人にベースライン健診を行った。3 ケ月（週 1 回 2 時間）の研修の後に公立小学校、幼稚園、児童館への定期的訪問・交流活動を開始し、2005 年 3 月に 2 回目の健診を行った。 **研究目的：**高齢者の高次生活機能である社会的役割と知的能動性を継続的に必要とする知的ボランティア活動「子どもへの絵本の読み聞かせ」「PEPRINTS」を開始し、その１年間の取り組で得られた知見と今後の開大を明らかにする。

8	田中直子他/（2018）	**対象者：**施設利用者（高齢者 3 名子育て世代の母親 3 名） **研究目的：**高齢者と子育て世代の母親が直接世代間交流をする先駆的な施設に着目し、施設の持つ意義と役割を明らかにする。

研究 2 では、祖父母世代に対し、事前教育を実施し、子育てマイスターを認定し、ボランティアとして子育て支援を行っている施設において、実態と課題についてフォーカスグループインタビューを行い分析した。

インタビューの対象者は、40 歳代管理者 1 名、30 歳代保健師 1 名、30 歳代保育士 1 名であった。また、登録ボランティアは 50 歳代 3 名、60 歳代 8 名、70 歳代 12 名の合計 23 名である。

運営側が考える事前教育を祖父母世代に行った血縁関係の無い関係での世代間交流の実態として、105 コード、14 サブカテゴリー、4 カテゴリーが抽出された。以下カテゴリーは【　】、サブカテゴリーは〈　〉、コードは「　」で示す。

F 県 M 町の特性として、若い世代は成長し、大学進学、就職で県外に移住してしまい、また一方では、転勤で県外から子育て世代が移住してくるため、【高齢者は単身世帯であり子育て世代が転入してくる地域の特性】があった。「高齢者が多いが孫はいない」「若者は進学で県外へ出ていく」「高齢者の単身世代が多い」という〈M 町だからこその人口構造〉があった。また、「社宅のあるひとつの集落に子育て世代が集まっている」「近くに頼れる人がいない」「友達をつくることが苦手な人は孤立する」という〈都会から子育て世代が転勤してくる〉という特性から「転勤の人は祖父母の繋がりがないため、この交流が必要な繋がり」になっていた。

【祖父母世代ボランティアは老いを感じながら担っている】は、他の世代間交流とおなじような〈高齢者という特性〉により、老いを感じ担っていた。一方で〈他のボランティアとの比較〉では、「子どもと遊ぶことはハードルが高い」や「他の老人会や公民館の手伝いならやるけど、子どもはいいわ」というなど、子どもに関することは苦手意識がある人が多い印象があったが、〈前職を踏まえての特性〉として「以前子どもに関わっていた人がボランティアに多いようであった。

地域での世代間交流では【互助で支えあうことの困難さ】が抽出された。〈ボランティア募集の困難さ〉では「老人会に出て声かけをしてお願いする」「電話をしてお願いする」など苦戦しており、〈ボランティア継続〉の難しさを感じていた。一方で〈ボランティアの育成〉として「募集を一旦中止して再研修を実施」することや「活動の実際の見直しが必要」と考えていた。さらに〈ボランティアの見返り〉として、「ポイント制で町の商店で使える商品券があたる」など工夫をこらしていた。

運営側は、【世代間交流には社会的相互作用がある】として〈顔見知りになること〉〈季節感のあるイベントを一緒に楽しむ〉などを大切にしながら、〈双方にメリットがある関係性〉であることを考え運営を行っていた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
高齢者が単身世帯であり子育て世代が転入してくる地域の特性	M 町だからこその人口構造	高齢者は多いが孫はいない
		若者は育っても進学で県外へ出ていく
		高齢者の単身世帯が多い
	都会から子育て世代が転勤してくる	社宅のあるひとつの集落に子育て世代が集まっている
		近くに頼れる人がいない子育て世代が多い
		転勤の人たちは祖父母との繋がりがない為、この交流は必要な繋がり
		友達を作ることが苦手な人は孤立する
祖父母世代ボランティアは老いを感じながら担っている	高齢者という特性	高齢になると年々体の変化を感じる
		足腰がつらそうな人はいる
		身体がきついと毎回言っている
		「もう子育てはいいわ」と言う
	他のボランティアとの比較	子どもと遊ぶということはハードルが高い
		老人会や公民館の手伝いならやるけれど、子どもはいいわという人が多い
		中には、「世話するよ」と言ってくれる人もいる
	ボランティアを行いながら他の仕事をもっている	高齢者の人もなかなか忙しく、シルバーの仕事をもっている
		身体が続く限り、仕事をしないと生きていけないから
		ボランティアを行っている人は他の役割も担っている
		始まって 3 年なので辞めた人はいない

	ボランティア活動の実際	イベントのたびにこちらから電話をしてお願いをしている
		男性には男性に適した役割がある
		季節のイベントは、一緒に運営からしてもらう
	前職を踏まえての特性	以前子どもに関する仕事をしていた人がボランティアに多い（看護師、保健師、保育士、教員など）
互助で支えあうことの困難さ	ボランティア募集の困難さ	老人会などに顔を出して声掛けをして募集する
		電話をかけてお願いする
		やりたいと言ってくれる人が少ない
	ボランティアの継続	今後抜けていく人もいるだろう
		募集のはがきが返ってこない人もいる
		新たな人の確保が必要となる時期がくるだろう
		この事業を辞めたいと申し出たが、通らなかった
	ボランティアの育成	募集は一旦中止して、再研修を実施
		活動の実際も見直しが必要
	ボランティアの見返り	ポイント制で町の商店で使える商品券があたる
		得点のある事業にのっかり、何かを還元していきたい
世代間交流には社会的相互作用がある	双方にメリットのある関係性	関われば関わるほど双方へのメリットが増えていくとよい
		ボランティアは地域の人ということもあり、若者の知らないことを知っていて話をしてくれる
		教えてもらったお母さん方も喜んでおられた
	顔見知りの関係になる	センターの前のカフェでボランティアさんと子育て世代の親子が出会い、笑顔で挨拶をしている
		町で声をかけられる関係になる
		親以外の人に地域で知っている人が増える
		○○ちゃんって子どもさんの名前をよんでもらって母親も喜ぶ
	季節感のあるイベントを一緒に楽しむ	祖父母世代だけでいると、季節のイベントなんて関係のない暮らし
		ボランティアさんも一緒にイベントを楽しんでいる
		行事に季節感があっていい

研究３では、研究１・研究２の結果により、祖父母もボランティアではなく参加者として、ジネラティビティ（世代継承性）が向上するプログラム、そして子育て世代の孤独感が軽減するようなプログラムを構築中である。田中[1)]の文献より、双方が参加者であり、【高齢者支援機能があり】〈孤独感が軽減〉するプログラムがどのように行われているのかを実態調査し、そこで集う人々（子育て世代と祖父母世代）ジネラティビティ尺度と孤独感尺度を使用し対照群に比較しジネラティビティが高いか、孤独感が少ないかを分析し現在プログラム作成中である。

引用文献
１)田中直子,斎藤泰子(2018)．世代間交流における利用者評価―高齢者と子育て支援の母親の語りから―．武蔵野大学紀要，第 12 号,21－29.
2)和田希美,西村昌記 (2017) が高齢者のジェネラティビティと精神的健康に与える影響.東海大学健康科学部紀要,第 2 号,45－54.
3)小林江里香他.中高年者を対象とした地域子育て支援尺度の開発(2016）.日本公衆衛生誌,第 63 巻 3 号,101-111.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Mitasaki　Hiromi
２．発表標題 Child-Rearing Support using Intergenerational Interaction without Blood Relationship
３．学会等名 EAFONS2024（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 Mitasaki　Hiromi
２．発表標題 The State of Child-Rearing Support After Training for the Grandparents’ Generation in the Context of Intergeneration Exchange between People with No Blood Relation
３．学会等名 EAFONS2025（国際学会）
４．発表年 2025年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高村　理絵子 (TAKAMURA Rieko) (00824202)	福井大学・学術研究院医学系部門・助教 (13401)	
研究分担者	上澤　悦子 (KAMISAWA Etuko) (10317068)	大阪信愛学院大学・その他部局等・研究員 (34455)	

6．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	内江　希 (UCHIE Nozomi) (10782683)	福井大学・学術研究院医学系部門・助教 (13401)	
研究分担者	嶋　雅代 (SHIMA Masayo) (50633385)	福井大学・学術研究院医学系部門・准教授 (13401)	
研究分担者	波崎　由美子 (NAMIZAKI Yumiko) (80377449)	福井大学・学術研究院医学系部門・教授 (13401)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関